

第23回 国際パネルディスカッション

「これからの石油・エネルギー情勢をどう見るか」

2014年2月19日(水)

経団連会館国際会議場

開会挨拶

(一財) 日本エネルギー経済研究所 理事長

豊田正和氏

パネルディスカッション

<パネリスト>

FACTS グローバルエナジーグループ会長

フェレイダン・フェシヤラキ氏

元米国エネルギー省エネルギー情報局長

ガイ・F・カルーソ氏

(独) 石油天然ガス・金属鉱物資源機構

上席エコノミスト

野神隆之氏

<司会>

(一財) 日本エネルギー経済研究所 常務理事 首席研究員

小山堅氏

主催

エネルギー総合推進委員会

(一財) 日本エネルギー経済研究所

JX日鉱日石エネルギー株式会社

JX日鉱日石リサーチ株式会社

要 旨

1. 短期の国際石油情勢展望

- 原油価格は 2014 年転換期を迎える。今年前半はブレントで 110 ドルあたりで推移するが、後半から年末にかけ、イラク、シリア、スーダン等からの原油が市場に一部復帰してくると、供給過剰となり価格は下落する。この供給過剰状態は来年まで続く。〔カルーソ氏〕
- 油価は米国からの軽質原油の供給増に伴い今年下落に転じる。ブレントは今年前半は 105～110 ドルで推移するが、後半には 100 ドルあるいは 100 ドル以下の水準まで下落する可能性がある。方向性が決まっているので、いつ下落するかだけが問題。〔フェシャラキ氏〕
- 今年 WTI の価格は 90～105 ドル、ブレントは 100～110 ドルと予想。ただし地政学リスク要因の展開によっては WTI は 85～110 ドル、ブレントは 95～120 ドルと振れ幅が拡大。〔野神氏〕
- 中東諸国の生産については、イラン原油の輸出が少量だが増加する可能性がある。またイラクも増産する見込み。特にクルド地域からの原油輸出に注目している。〔フェシャラキ氏〕

2. 中長期の国際石油情勢展望

- 石油需要の伸びは 100 万 BD/年程度と考えるが、その程度の伸びはすべて北米のシェールオイル増産でカバーできる。その他エリアの生産増は 2020 年以降。メキシコは 2030 年以降。中長期の油価は 50～100 ドルの範囲で推移すると予想する。〔野神氏〕
- 北米のライトタイトオイルやシェールオイルについて、EIA は 2020 年頃にピークを打つと予想しているが、生産技術はまだ未熟で現在の回収率はわずか 2%程度。将来的にはこの回収率も上昇し、生産のピークは後ろにずれて 2025 年ごろになるのではないかと。〔カルーソ氏〕
- 北米を中心に石油供給の増大が予想される中、米国のガソリン需要は大きく減少するため、油価は下方圧力を受ける。中長期の油価は 80～120 ドルと予想する。ただし生産コストの高い原油は油価が 80 ドルまで下落すると途端に生産量が減少する。〔フェシャラキ氏〕
- 油価は一時的に 70 ドルを下回るかもしれない。また、供給が潤沢な中、OPEC では減産協議がまとまる可能性は少なく、組織として混沌とした状況に陥ると思う。〔カルーソ氏〕
- 米国の製油所はサウジ等の重質油に対応した製油所が多い。一方、増産される米国原油は軽質油である。今後も米国は中東から手を引くとは考えにくい。〔野神氏〕

3. 天然ガス・LNG 情勢の展望他

- 天然ガスは米国では「供給過剰」でどんどん輸出されるという印象があるかもしれないが、実際はガス価が低迷したため、採算割れで生産が伸び悩んでおり、さらに米国での寒波の影響でガス需要が増大して、短期的な需給はむしろ逼迫している。〔野神氏〕
- 米国のシェールガスの回収技術はタイトオイルの技術よりは進歩している。回収率も向上してきており、長期的にガスの供給に不安はない。現状の需給逼迫は価格暴落の影響で、短期的なものと思う。ガス価格が 4～6 ドル/百万 BTU であれば供給に問題ない。〔カルーソ氏〕
- 中東諸国は全体としてはガスは輸入ポジションとなる。一方、新しいガス供給地域は米国、カナダ、モザンビーク。ロシアのガスは日本まで輸送するとコストが高く価格面で難あり。〔フェシャラキ氏〕
- 今すぐに日本着の LNG 価格を下げることは難しいが、指標価格の違う米国のシェールガス等をてこにして、また LNG プロジェクトへの積極的参加で、さらに石炭火力等エネルギー源の多角化も合わせれば、将来の LNG 価格引き下げにつながると思う。〔野神氏〕